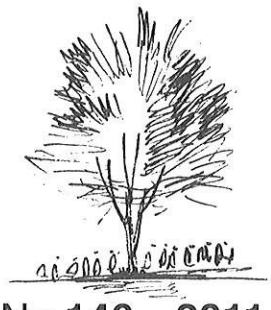
ひかりのこ

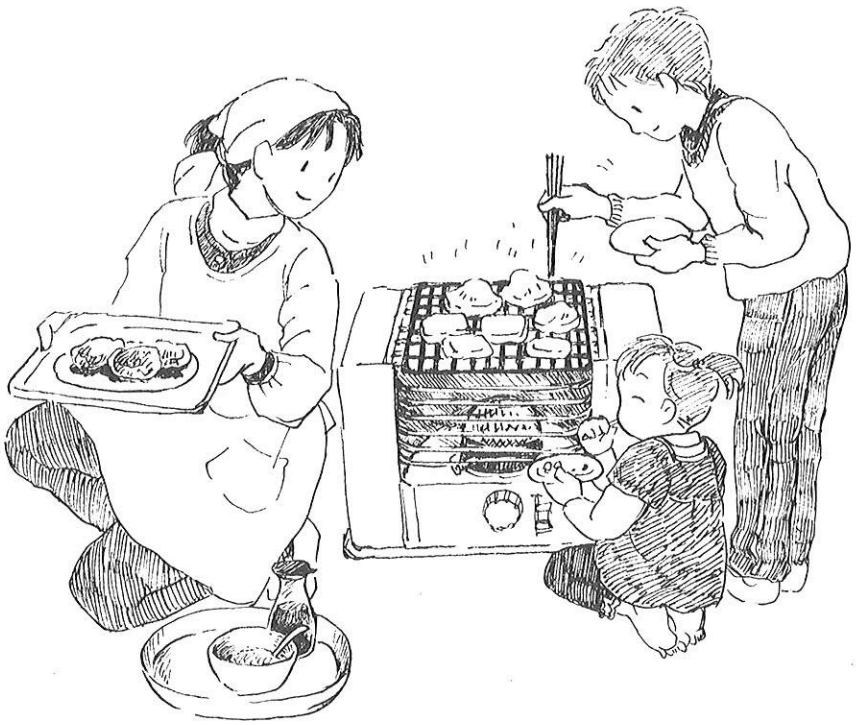
光の子



No.146　2011.1.1

●年間聖句　光の子として歩みなさい。（エフェソの信徒への手紙５章８節）

明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお願い申し上げます。
社会福祉法人　光の子どもの家



「　おもち、焼けたかな？　」　　挿絵・中島由起子

「一月」

ゆく年や涙ぐましき未完の絵
忘れゆくためにも欲しき楷明り
野に出でて迎ふる初日身に通す
残月を回して初日迎へけり
一月や板東太郎あるがまま
傾きて倒れぬ樹氷一つ一つ
待春や一人一人の子の光り

落合　水尾
（「浮野」主宰）

発行／社会福祉法人　光の子どもの家　TEL/0480-72-3883　FAX/72-6649　振替／00130-1-128022
編集／光の子　編集委員会 e-mail:hikarinoko@ceres.ocn.ne.jp 〒349-1155 北埼玉郡大利根町砂原277　印刷／プリンテング瑛和

新年のご挨拶

竹花信恵

新年あけましておめでとうございます。昨年は、おかげさまで創立二十五周年という節目の時を迎えることができました。お寄せいただきました多くのお励まし、お支えを心より感謝申し上げます。次の五年を見据えるこの時、新たな気持ちで初心に立ち帰り歩んでまいります。

ここは、さまざまな事情により自分の家族と共に生活できない子どもたちの、家族に代わる生活の場です。できる限り家族に近づくこと、それをめざして日々取り組んでまいりました。幼い子どもたちから社会に片足乗せながら今にも踏み出そうとしているメンバーまで、男女混合、年齢はたて割の一グループ五名ぐらいの子どもたちが担当者と共に寝食を共にしているのが私たちの日常です。定員が三十六名。出会った年齢はそれぞれですが、長期の連続したかかわりが必要な、ここから「自立」をめざす子どもたちが大半です。

「大きくなったら何になる?」という夢より、「もしかしたら今度おうちに帰れるかも知れない」という見果てぬ夢に不安定に寄りかかる姿もたくさん知らされます。どんなに明るくどんなに元気でもその質量は異なってもそれぞれが抱えている気持ちであることを思います。その苦しさも痛みも寂しさも丸ごと包むことが出来るように祈り願うことしかできません。私たちが力を合わせなければならないことは出会えて良かったという関係を生活の中で豊かに拡げていくことです。

それと共に、今までの過去より、これからの未来の大切さを思わずにいられません。何よりこれからが一番長い子どもたちの、進路を定める時に立ち合い、押し出し、見守っていきます。

教育の格差、貧困と教育の問題も多く取り挙げられています。施設だから、お金がないから、無理だからとあきらめなければならない要件をできるだけ取り除いていくこと、どうせ、自分なんて、といつのまにか心の中に立ちはだかってしまう壁を超えることは、ずっと私たちの課題でした。その思いを正面から受けとめていただき「光の子どもの家自立進学基金」をたち上げてくださるなどさまざまな場面で、力強く応援していただいていることを、あらためてお礼申し上げます。勉強というと避ける自信のなさも、大学、あるいは専門学校でがんばっている先輩たちの背中をみての生活をしていく中で少しずつ薄まっていくかも知れません。子どもたちにとって大きな希望につながっていきます。

社会の中で生きていくことの自信をつけるには今まで考えていた以上の月日がかかりそうな現実にもぶつかっています。義務教育が終了したからといって社会に出せるわけはなく、高校を卒業できたからあとは自分で、ということも考えられません。いったいいつになったらと思いをめぐらせながらも、それでも目標を子どもにとっての利益にあわせていくのが私たちの役割だと考えます。

光の子どもの家を卒園して、その後もその子らしく生きていくこと、そして疲れたら休みに戻りまたその子らしく生きていくこと、そんな願いのもと関係を大事に育んでまいりました。うまくいったとか失敗したとか一喜一憂の日々もありましたがそうではなく神さまのご計画の中にひとりひとりが生かされ守られていることを今さらながら思うこの頃です。これからもお祈りに覚えていただけましたら幸いです。

今までに出会った子どもの数は、いつのまにか三けたになりました。いつも顔をみることができ声も聞ける卒園生ばかりではありませんが、何があってもなくても帰ってこれる家でこれからもあり続けられるよう願っております。

この年も皆さまの健康が守られ、神さまの豊かな祝福がありますように。本年もどうぞよろしくお願い致します。

「共育ちカンガルー日記」

(11) 日だまりの教室

近藤みちる

海の子教室の扉を開けると、そこには柔らかい冬の日だまりが、そしていつもの笑顔が私たちを迎えてくれた。それは一年前、初めてこの扉を開けた瞬間と変わらぬ光景だった。私と娘のユキにとって、今日は海の子教室最後の日だ。一年間通ったこの暖かい日だまりの部屋から、私たちは巣立っていくのである。

海の子教室は、発達につまずきのある未就園児が通う療育教室である。障害福祉センターの中庭に面した一番日当たりのよい部屋で、月に二回開かれるグループ療育のクラスである。先生が三人、通っている親子も数組の、小ぢんまりとしたアットホームな教室だ。

私とユキがこの教室に通い始めたのは、ちょうど一年前の冬のことだった。ユキはその時二歳三カ月だった。相談員からの勧めで、私たちは初めて療育の門を叩いたのだった。その頃のユキは多動も真っ盛り、目についた物に脇目も振らず突進し、手当たり次第におもちゃを散らかし、走り回り、物を投げ、母親である私の言葉も全く耳に入らないといった状況であった。クラスには他に三歳と二歳の男の子がいたが、自閉傾向という意味ではユキはずば抜けていたと思う。プログラムにも全く参加できず、癇癪ばかり起こしているユキの姿に、最初はひどく落ち込んだ。(ユキには無理なのかな…) 教室の隅っこでぽつんと力なく座りこんでいる私に、一人のママが声をかけてくれた。

「うちの子も、最初はユキちゃんみたいだったのよ。もう辞めちゃおうかと何度も思ったけど、三か月くらい頑張って通っていたら、だんだん変わってきたの。だからきっと大丈夫。一緒に頑張ってみようよ。」

それは、一筋の光のような言葉だった。同じ不安や悩みを抱えるママが、私の他にもいることを初めて知った。光の筋を手繰り寄せるような思いで、私もここで少し頑張ってみようと思えたのだった。

窓から差し込む冬の日射しが、私たちをぽかぽかと包みこんでいた。言葉に遅れがあり自閉傾向を持つ子供たちは、言葉という道具を持たないそれぞれの世界に住んでいるように見えた。一緒に遊んだり喧嘩したりすることもほとんどなかった。公園や子育てサークルでは出会ったことのない、静かな空間。私はやっと、ユキを追いかけ回したり、制止したり、周囲に言い訳したりする必要のない場所にたどり着いたのだった。ここでは、先生方もママ達も、子供たちのありのままを受け止め、それぞれの個性を大切にしていた。定型発達の子供たちとは比べ物にならないほどゆっくりとした成長を、共に見出し、その喜びを心から分かち合うことができた。海の子教室は、私とユキが家の外で初めて得ることのできた安らぎの場であり、ありのままでいられる自分たちの居場所となった。

最初のうちは教室から何度となく脱走を試みていたユキだったが、いつの間にか、最後まで落ち着いて教室にいられるようになった。少しの時間なら椅子に座っていられるようにもなった。苦手だった集団で取り組むプログラムも、娘なりのペースで少しずつ参加できるようにもなっていった。クリスマス会、豆まき、ピクニック、プール、運動会…移りゆく季節の中を仲間たちと共に歩みながら、私たちは実に様々なことを体験し、たくさんの思い出を作っていった。

来年度に就園を控えた秋のこと、私はユキを幼稚園ではなく、障害児のための通園療育施設に通わせる決心をした。教育委員会に無理を通せば、補助員つきで幼稚園入園も果たせたかもしれない。でも、私はユキに背伸びをさせようとは思わなかった。やさしい日だまりの中で、実にのびのびとマイペースに頑張っているユキの瞳の輝きを、大切にしていきたいと心から思えるようになった。春を待たずして通園許可の連絡を受けたとき、私は正直戸惑った。もう少しだけ、居心地のよい日だまりの教室で過ごしたかった。

「淋しいことだけど、本当はとても嬉しいことなのよ。ユキちゃんもママも、階段を一段登るのだから。」

先生方はそう言って、静かに私の背中を押してくれたのだった。

「一年間、親子でよく頑張りました。楽しかったね。ありがとう。」

手書きの卒業証書には、そんな言葉と共に、折り紙で折られたたくさんの花が飾られていた。

次の一歩は少し怖いけれど、振り返ればいつでもあの優しい日だまりの場所がある。その温もりをいつも背中に感じることができるから、私もユキも勇気を出して歩き出せる。

冬日向手遊び唄と母と子と　みちる

エッセイ

母の歌

彫刻家　中島　睦雄

地球上のどこかで、現在でも戦争が行われている。

私が小学校の、いや国民学校の三年生の時まで大東亜戦争が続いていた。その頃の私は、大きなゆめを持っていた。そのゆめとは「立派な兵隊さんになる」ことであった。もっとも、その頃の子供たちの将来に対するゆめには、現代のような多様な選択肢はなかった。教室で先生から「大きくなったら、何になりたいですか？」と聞かれれば、男の子はたいてい「兵隊さんになります。」と答えたものだ。

私もその当時、子供ながら自分の武器を持っていた。竹やりである。竹を切ってきて、先端を尖らせ、敵国アメリカの落下傘部隊が降りてきたら、下から斜めにノドを突くという戦法である。そんな非現実的な想いで、抽象的に自分なりの戦争を考えていた。つまり、子供にそんなことを考えさせるような気分が、世の中に満ちていたのではなかろうか。世界の大国と戦っても日本は敗れない。神風が吹くのだ。でも、そのようなことを、子供自身が発想するわけはない。やはりどこかで教えられ、感じ取らされていたものであろう。

しかしそんな中で、あの戦争に疑問を持ち、反戦を主張した人もいたのは事実である。また、積極的にでなくとも、自分の心の中に反戦の思想を抱いていた人も、もち論いたわけである。

先ごろ私は「野上弥生子とその時代」という四百ページ程の本を、著者の狩野美智子さんという方からいただいた。この本の中の「文学者の戦争責任」という部分に注目させられた。百歳を超える長命であった文化勲章受章者の野上弥生子の作詞による「母の歌」がとり上げられているからである。作曲は、埼玉県大利根町（現加須市）生まれの下總皖一。

この本の中で、或る野上弥生子の研究者が、「野上弥生子が戦争協力はしなかったと戦後、胸を張って何度も発言しているが、詳細に見るとポロポロンと出てくると書いている。」と記されている。そしてまた『戦争否定』の姿勢を貫き通したと『断言』する弥生子に、私は問いたいことがある。それは彼女が作詞した文部省唱歌『母の歌』についてである・・・」とも。或る研究者がそう書いていると、著者が述べている。

その「母の歌」は、戦争中の国民学校の音楽の教科書に載ったものである。

母の歌

一　母こそは、命のいづみ。
　いとし子を胸にいだきて、
　ほほ笑めり、わかやかに。
　うるはしきかな　母の姿。

二　母こそは、み国の力。
　をの子らをいくさの庭に
　遠くやり、心勇む。
　ををしきかな　母の姿。

三　母こそは、千年の光。
　人の世のあらんかぎり。
　地にはゆる天つ日なり。
　大いなるかな　母の姿。

一番と三番は、別に問題はないがこの研究者は、この二番の歌詞を批判の根拠としているのであろう、と述べられている。つまり、この二番の歌詞こそ、反戦どころか戦争に協力的であった証拠である、ということである。

しかし、この本の著者狩野美智子さんの関係者が、下總皖一資料室を訪れ、下總の肉筆の楽譜をしらべてみると、この二番、つまり戦争に協力的な歌詞はないのである。

したがって「この二番は弥生子らしくないこと、それに下總の肉筆の楽譜に二番がないことなどを根拠に、この二番は弥生子が作ったものでないと断言できるのではないか。」と述べられている。

では、誰がこの二番を作ったのか。当時の戦争中という状況から考えて、文部省で勝手に作って入れたものであろう、という。

「母の歌」は、格調高い美しい歌であるとされている。したがって、戦後はこの二番抜きで歌われている。

竹やり少年であった私は、低学年であったために、この歌は教わらなかったが、戦争のない平和な時代がいつまでも続き、あの二番の入らない「母の歌」が純粋に美しい歌として末永く歌われ続けるよう、祈りたい。

《参照》
狩野美智子『野上弥生子とその時代』（ゆまに書房）

ゆったりとものを思う

前山形大学学長　仙道　富士郎

前号にも記したが、ありがたいことに、帰国後たくさんの講演の依頼を受けて、この一年間とても忙しい日々を送ってきた。先日、ロータリーでの卓話を終わって、ひとまず二月までは講演の予定がなく、近頃ようやく落ち着いた日々を過ごしている。といっても、何もしないで時を過ごすということは不得意のようで、これまでの講演の内容をまとめて冊子を作る作業に取り掛かったのだが、これは期限が限られているわけではなく、心の余裕をもって仕事ができるので、圧迫感はなく、言葉通り久しぶりに、ゆったりとものを考えている。

当面、責任を持って成就しなければならないことがないという状況は、職についてこのかたはじめて経験しているわけであるが、こんなにも自由度を持ってものを考えることができるとは思っていなかった。随分と多くの本を日々読んでいることになるが、読んだ本の正確な内容が、長い期間記憶として残ることを期待することは難しい。人並み以上に脳の老化は進んでいるようである。その辺のところに神経質になると、「何のために本を読んでいるのだ」ということになり、はなはだ不愉快になる。しかし、一冊の本を読み終えて、あるいは、途中でその本を捨てて、著者が何を言わんとしているかという大雑把なことは、一定期間残像するので、本の内容が大事だと思った時は、そのことに関する自分の考えをまとめて文章にしておく。今の私にとって関心事である「環境教育・自然教育」や「国際理解教育・開発教育」などについては、色々と雑多な著作をよんだが、それらに関する自分の考え方をまとめて文章化しておいた。自分が記した文章の内容も、長時間経過すると、全体像がすぐには脳裏に浮かんでこないこともあるが、もう一回読みなおすと思いだすことができるから、少し安心である。

いま自由な時間を持つことができて、最も嬉しいのは、一端自分の頭のなかに固定化してしまった概念をさらに進化させる機会に遭遇するチャンスがあることである。

環境教育に関して考えを進めていた時に、どうしても宮沢賢治の考えを避けて通ることが出来なくなり、これまで彼の著書を系統的に読んだことがなかったので、文庫版の全集を買って、関連するようなところを読み始めたことがあった。彼の宇宙論的な考え方は、自分との関係で自然をどう把握するかという自然観よりももっと大きな問題設定であり、宇宙のなかで自分をどう位置づけるかという内容を包含しており、重要な視点であると理解した。しかし、環境問題に関する文献をさらに検索していく中で、「宮沢賢治と戦争」の問題が浮上してきた。調べて行くうちに、彼が戦争推進の中心的なイデオローグであった一人の思想家に傾倒していった経過が明らかになった。当初考えていた、宮沢賢治の童話を環境教育の教材として使用するという案は、もう少し慎重に検討する必要があるということに気づかされた。いま、宮沢賢治についての書籍をGoogleで見つけては、さらに読み始めているところである。

以上のような状況で、寄り道ばかりでさっぱり考えはまとまっていかないのだが、思考の幅は広がってきたような気はする。

ただ、いずれにしても、私は、読書を楽しんで、読書のなかに喜びを見つけていく書斎人ではない。読書の結果がなんらかの行動に結びついていくなどと、短絡的に思ったりはしていないが、「老人にも何かできることがあるのではないか」といった想念を抱きながら、本を読んでいることは事実である。

いや、なにもあせることはないのだ。こんなにも自由な思考の時間をいただいたのだから、時間をゆったりと使って、少なくとも自分にとっては素晴らしいと思えるような考えに到達すれば良いのだから。

ひかりのこ …… No.146

明けましておめでとうございます

謹んで新春のお祝いを申し上げます。旧年中は皆様方よりの熱き祈りとお支えにより二十五周年を迎え、四半世紀を子どもたちと共に過ごすことができました。本当にありがとうございました。

また新たな気持ちで二十六回目の新年を、幼児八名・小学生十三名・中学生九名・高校生六名・自立支援中の卒園生四名そして職員二十三名と共に迎えることができました。重ねて心より感謝申し上げます。

開設後の数年は、正月家庭に帰省できる子どもたちも数名おりましたが、今では殆どの子どもたちが、元旦をこの光の子どもの家で迎えております。年々厳しくなる社会情勢が、家族、家庭の有り様を変えてしまい、そのつけが子どもたちの心を苦しめています。私たち側にいる大人が、ここで出会った子どもたちに寄り添っていくことを、見捨てないことを確認して、この年も前進してまいります。今後ともお支えとご指導をよろしくお願い申し上げます。

新しき年も皆様方のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

施設長　田中　郁夫

あけましておめでとうございます。今年も子どもたちの笑顔が絶えない毎日であるように願っております。同じような毎日を繰り返しながら過ごしたこの一年、日々成長している子どもたちとの時間を振り返れば、それが同じではないことを感じます。そしてその貴重な時間に関わらせていただいていることに感謝します。今年もどうぞよろしくお願いします。

小西　剛史

二〇一〇年も残すところあと僅かとなりました。今年は例年にも増して不景気やインフルエンザなどいろんなことがありましたが、この職場で無事一年を過ごせましたのも、皆様の多大なご支援のおかげでございます。大変感謝しております。最近では、新年に向けて大掃除やお餅を搗くなど、良い年を迎えられるように準備をしています。来年も何かとご迷惑をおかけするかもしれませんが、ご指導ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願い致します。

新年には、また元気な姿で皆様とお会いできますことを楽しみにしております。よいお年をお過ごしください。

鈴木　康孝

明けましておめでとうございます。旧年中は大変お世話になりました。今年もどうぞよろしくお願いします。

お正月はみんなでこたつでのんびり過ごします。現役佐藤家の子どもたちは勿論、元佐藤家をはじめとにかく元光の子どもの家の子どもたちや大人たちも、みんな堂々とのんびりゴロゴロしている風景がとても好きです。

卒園したばかりの憲也君も、堂々と卒園生面をして帰ってきてくれたら嬉しいな、と思っています。

来年はあの子が、再来年はあの子が卒園の年を迎えるけれど、きっと帰りたいときに帰れる家として、存在として、つながっていけるよう祈ります。

そして、その“つながっている感”を私と同じくらい子どもたちも持ってくれたら、と願わずにはいられません。

岩崎まり子

あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

昨年、光の子どもの家には新しい仲間が五人増えました。状況としては決して喜ばしいことではありませんが、出会いには感謝しています。特に私がいる仙道家には、五人のうち四人います。昨年に引き続き騒がしい一年になると思われますが、皆様のご支援の下、生活を守っていきたいと思っています。

親族と一緒に正月を迎えられない子達が多いですが、一緒に過ごす仲間とともに、今年の始まりを健康に楽しく迎えたいと思っています。今年一年皆様が、健康に日々を過ごされることをお祈りいたしております。

田口　貴子

新年明けましておめでとうございます。昨年もたくさんの温かいご支援をいただき、本当にありがとうございました。

光の子どもの家で過ごす月日を重ねる度に皆さまからのご支援があってはじめて、子どもたちにとってより良い生活を目指すことができるのだと、より強く感じるようになりました。その気持ちを忘れずに、今年も子どもたちと楽しい生活を送れるようにしたいと思います。

また私にとっては、ここで迎える四度目のお正月です。子どもたちの成長に負けないくらい私も成長しなくては…と毎年思っているのですが、なかなか難しいです。それでも、今年もここでお正月を迎えられることに感謝して、子どもたちと楽しいお正月を過ごしたいと思います。

皆さまにとっても良い一年となるよう祈っております。今年もよろしくお願い申し上げます。

高野真夕子

あけましておめでとうございます。昨年も多くの方にご支援いただき、ありがとうございました。今こうして子どもたちと共に、穏やか（？）な気持ちで二度目の正月を原田家で迎えられ、とても嬉しく思っています。

さて私事ですが、今年は“焦らず急がず”をテーマに生活していきたいと考えています。「自分が心身に余裕を持って行動することが、子どもたちとの関わりにも良い影響をもたらすはずだ」と思ってのことですが、予測不能な子どもたちです。果たして上手くいくのでしょうか？結果は、この光の子でお伝えしていければと思います。

去年一昨年と「自分に何ができるか」を躍起になって探していました。今年は子どもたちに多くを教えられ、助けられて今の自分がいることを再確認しながら、日々過ごしていきたいと思います。至らない私ではありますが、どうぞよろしくお願い致します。

和田優右子

あけましておめでとうございます。

今年も一日一日を大切にして、何気なく穏やかな生活を積み重ねながら、そういう生活が幸せだと子どもたちに感じさせることができるような心理支援を行っていきたいと思っています。皆様におきましても、健康で過ごされる良い一年となることを心よりお祈り申し上げます。どうぞ今年も温かく見守ってくださいますよう、よろしくお願いいたします。

積みどり

新年明けましておめでとうございます。沢山の方々の暖かいご支援をいただき、ありがとうございます。卒園生が自分の子どもたちを連れてお正月に帰って来るのが年毎に多くなり、大家族になります。

十二月二十八日は恒例の餅搗きで、六十キロ臼で搗きます。枯野に「ヨイショ、ヨイショ」と餅搗きの谺がひびきます。おしるこ、雑煮、納豆餅、きな粉、からみ餅など盛り沢山です。のしもちはおせちと一緒に家庭に帰る子のお土産にもなります。

これも暖かいご支援の賜物と深く感謝致しております。新年に向かい、心ひきしめてまいりたいと思っております。どうぞ皆様方にもよきお年であられますように。

鎌田　洋子

新年明けましておめでとうございます。私事でございますが、昨年末には事務屋さんが一年で最も輝く県指導監査がございました。朝早くから夜遅くまで事務所にこもりきりの年末でしたが、すっきりと解放されて新しい年を迎えております。一日一日の積み重ねが大切だという事を嫌と言うほど思い知らされ、今年こそは気持ちも新たに事務仕事に向かいたいと心から思っております。

まだまだ寒い日が続きますので、皆様のご健康が守られますようにお祈り申し上げます。本年もよろしくお願い致します。

田中　要一

謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

旧年中はひとかたならぬお世話になり、誠にありがとうございました。

光の子どもの家も皆様のお陰をもちまして、無事に新春を迎えることができました。これを機に職員一同一層気を引き締めて、皆様のご支援にお応えいたすよう努力し、子ども達の将来の為になる事を積極的に行っていきたいと思います。

今後ともかわらぬご支援とご指導をよろしくお願いいたします。

皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げます。

福島　文明

プ・リ・ズ・ム

明けましておめでとうございます。昨年中もたくさんのご支援をいただき、ありがとうございました。

光の子どもの家では、毎年十二月二十八日に大人も子どもも総出で、昔ながらの杵と臼でのお餅搗きをするのが恒例となっております。元気な声が響く中、小さい子どもたちも軽い杵を振り上げてペッタンペッタン。餅米を蒸し上げる匂いに誘われて、搗く前の餅米を頬張る食いしん坊。体も大きくなった中高生が、慣れない手つきで一生懸命杵を振り下ろします。自分たちで搗いたお餅をきな粉餅やお雑煮、お汁粉などそれぞれの好みの味でいただきます。

毎年の光景ですが、この日に子どもたち一人ひとりの楽しそうな顔を見ますと、この一年も無事に過ごして、こんなに豊かに成長できて本当に良かったねと心から思います。

お支え下さる一人ひとりに心から感謝の意を込めて。今年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

平川　光子

明けましておめでとうございます。皆さんの暖かいご支援をいただき、ありがとうございます。今年で三回目のお正月を皆さんと迎えることができ、本当にうれしく思っております。皆様のご健勝とご多幸をお祈りいたします。本年もよろしくお願い致します。

梅田由味子

子どもたちの季節　仙道家

明けましておめでとうございます。昨年のお支えに心より感謝申し上げます。

昨年は仙道家に四人新しい子どもたちがきました。この出会いに感謝すると共に、色々な葛藤、責任を感じながら想い、考えたりしています。そのうち三人は姉妹であり、私が担当しています。

一番上の詩音は、光の子どもの家に来たときは人見知りもせず、誰にでも関わりを求めていくような落ち着きのない子どもでした。今では少しずつですが、私のことを「ママ」とか「お母さん」と言って、愛着関係が育ってきているのかなと思うこともあります。幼稚園にも週二回行き始め、できることも増えてきて、下の子の面倒を見たりと大分お姉さんらしくなってきました。

まん中の真理は人見知りで、場所見知り。表情も全て緊張した様子でしたが、姉の影響を受けながらおちゃらけてみたり、自己主張までするようになってきました。また排泄も自立し、姉同様にできることが本当に増えました。

一番下の穂香も人見知りで場所見知りでしたが、今では様々な影響、刺激を受けて、文句を言ったり他の子のいたずらを言いつけに来たりとわんぱくに育っています。最近ではおしゃべりがとても上手になり、その成長スピードにみんなで驚いています。

また、三人の小さな姉妹たちにばかり関わっていると、小四の悠里がやきもちをやいたりして、今では幼児四人という感じです。

いつもいつも騒がしく、落ち着かない日々ですが、子どもたちの成長を温かく見守り、楽しんでいきたいと思います。

岩瀬　志穂

光の中で　佐藤家

新年あけましておめでとうございます。皆様の心温まるご支援のおかげで光の子どもの家一同新たな年を迎えることができそうです。皆様にとって良い一年となりますようにお祈り申し上げます。

新年を前に、我が家の誠にグッドニュースが届きました。念願が叶って大学に合格することができました。卒業後は開発途上国の子ども達のために働きたいと希望を抱いている誠にとって遙かな道程の第一歩を踏み出したばかりですが、大学の四年間をかけて勉強も人間としての成長も鍛えてほしいと願っています。昨年の今頃は学校へ行くことの意味がわからずもがき苦しんでいた誠ですが沢山の方々に助けられてここまで来ることができました。これからは支えてくださった方々に感謝の心を忘れることなく、歩んでほしいと祈ります。

穴水　祐介

原田家日記

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

一緒に生活している子どもたちは、みんなかわいくてすてきな子どもたちだなーと思っています。でも表現の仕方、コミュニケーションがあまりうまくなくてもったいないな、生きづらいだろうなとも思います。

小学一年生の大輝もそのひとり。言葉より先に手が出てしまったり、仲良くしたいのに悪口を言ってしまったり…。そのような状態でクラスのお友だちにも迷惑をかけてしまいました。

小学校の先生方の努力と保護者の理解で、少しずつですがお友だちと楽しく過ごせることが増えてきました。お友達、先生方と楽しい充実した時間を共に過ごすことの心地良さをたくさん経験してほしい、と願っています。

ところで、大輝の頭の中では、命はいくつもあることになっていて、

「大輝死んでももう一コ命あるから大丈夫」

「命はひとつしかないんだよ」

と答えると、

「じゃあ、死んだらどうなるの？」

と大輝。

「詳しくは山ノ下牧師に訊いて下さい。たぶん天国か地獄に行くのかなー」

「大輝は天国行きたい。天国は雲の上にあるんだよね。どうやって行くのかな。天使の梯子のぼるのかな。富士山は雲より高いんだよね。奈美ちゃん富士山登ったんだよね。奈美ちゃーん、富士山登った時、雲の上に天国あった？」

「あるわけないじゃん！」

と、奈美に一蹴されてしまいました。

一年生の考えることは、やっぱりすてきです。

池田　祐子

季節のおとずれ　竹花家

新年明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願いいたします。

先日、小学校の持久走大会がありました。六年生の美也子にとっては小学校最後の持久走大会です。この日のために、美也子は毎朝六時前に起き、ランニングを続けてきました。美也子は走ることが大好きです。好きだからと言っても、継続することは簡単なことではありません。普段はあまり人と競ったり争ったりすることを好まない美也子ですが、「走る」ことに関してはゆずれない強い思いがあるのです。持久走大会当日、鈴木指導員に「油断するなよ」と言われ家を出た美也子。私もドキドキしながら応援に行きました。いつも通り、自分のペースを崩さず、まっすぐ前を見て走り切った美也子はとても立派でした。堂々の1位…毎朝のランニングをしている美也子を見ていた分、私も心から「良くやったなぁ」と感心させられました。これからも美也子の「まきさ～ん、足マッサージして♪」に応えていきたいと思いました。

牧野由紀子

養護メモ 133

養育論の試み

（2）「子どもたちは」

菅原　哲男

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願いします。

児童養護施設を利用するに至った子どもについて他者に伝えようと、改めて語るとすれば、どう説明するのだろうか。そんなことを昨年後半は考え続けてきたように思う。

児童養護施設光の子どもの家にいる子どもたちを見つめ、関わり続けて二十六年目も終わろうとしている。一〇〇名を超える子どもたちがここに来て一緒に暮らしてきた。

いつも思うのである。この子どもたちはなんてすごいのだろう！と。子どもたちが生まれるまでに、喜ばれたことはなく、生まれてきたら、厄介なものとしてとり扱われた者がほとんどなのだ。そして、厄介なものだから、その存在に対して大人たちは否定的な関わりに終始したのだ。

ある年にやってきた小学生は、一見普通の小学生然としていた。にこやかに笑っている時などには愛くるしくも思えた。年度の途中でやってきて、多少のズレを克服してその年度を終えた。

その子は母親による過度のしつけが虐待に至るまで、執拗で激しく、長きに亘り繰り返されたものである。学校などの通報により保護された。

母親は、虐待を強く否定し、児童相談所と激しく争ったままの入所であった。児童養護施設への入所を拒んだが、児童福祉法28条による家裁の判断を仰ぐまでには至らず、不承不承にサインしてのものだった。

やってきて一ヶ月が過ぎる頃、その母親が児童相談所のワーカーに連れられてやってきた。母親は、体中をハリネズミのように防衛しながら情報を得ようと身構えてやってきた。面談の折にもメモをはなさず、児童相談所のワーカーやこちらのことを記録していた。児童相談所被害者のネットにも関わっていて、油断のならない様子だったのである。

それでも面会を繰り返し、子どもの暮らしに関わりながら、子どもたちの様子を見聞きするに従い、メモをとることもなくなり、ゆったりと、子どもとの関わりを愉しむようになってきていたのである。

そんな母親がやってきて二日ほど後のある日、その子に「お母さん来てくれてよかったね、楽しかっただろう？」と何気なく問いかけた。するとその子は、「えっ、何？何のこと？いつのこと？」と、空とぼけるような反応をしたのである。

この子は母親の話題には誰にも同じような反応をしていたことが間もなく分かった。中学生の兄も母親と面会に来ていた。「お兄さん格好いいね、君もお兄さんに似ているからいい中学生になるだろうね。」というと、「うん、そうなりたい」と反射的に答えた。兄の話題への反応と母親のそれには明確な違いがあり、母親に関する話題にはいつも「分からない」「なあに？」などと反応したのである。

母子関係の再生を目指していたので、ことさら彼の反応に戸惑っていた。心理士の積が、「あの子、解離性人格障害の疑いがあると思う。」と助言してくれた。

晩学した精神医学や臨床心理学のテキストに記されているその反応と違わず一致していたのである。

子どもは心身への強烈な打撃を親などから受けると、無力であることから、自らの生存のために虐待している親などに愛着し続けなければならないという矛盾に満ちた状況が続く。その攻撃の只なかでそれを感じることが出来なくなる、あるいは避けることが出来ないのに避けていると思い込み納得させるような心的はたらきによって自分を防衛する機能があるとされている。そして、現に自分の状況を把握できなくなる。

彼は自分が何が何だか分からなくなるほどに攻撃を受け、放置され、無視されることに耐えてきた。マイナスの総量は想像を超える。それは彼の責任によるものでは断じてない。全く責任がないマイナスを一身に負い続ける様を犠牲と教わってきた。目的のために自己の利益や生命までも捨てて挑んだり行動することをいうが、それは自らの意志でするものだ。不条理なマイナスを耐えなければならない、という使命感のようなものを、この子のそれまでの経過から感じられるのである。それが一定の限度を超えると、自らの存在や意識を一旦停止することで自己を防衛してきたものと考えられる。

仏教は自己を捨てて無我になることを悟りといい、イエスは、友のために命を捨てる、これより大きな愛はない、といった。

自ら選び取ったものではないが故に、彼らの存在が、「高貴さ」を表出し続けているのである。

現場から

虹を見上げて

倉澤　智子

明けましておめでとうございます。

今年六月、小学四年生の成黎は里親宅へ引っ越し、新しい生活をスタートさせました。

彼が光の子どもの家にやって来たのは二歳の時でした。生後まもなく両親から虐待を受け、大けがを負って入院。その後そのまま乳児院に入所し二歳で光の子どもの家に措置変更され、入所に至っています。

家族との再統合の可能性は望めないという状態で入所してきた彼。私が担当者として彼を受け入れる時には、どんなに短期間であっても、高校を卒業するまでは、私たちが育てることになるのだろう…そう思っていました。

家族との関係がまったく期待できなかった彼に、担当者としてできるだけプライベートな時間を提供しようと心がけました。担当者との外出、担当者の実家への宿泊などの機会を作り、回を重ねていく毎に担当者の家族との関係も深まり、親戚のような関係になりつつありました。

しかし、担当者一人だけでは、実の母から授乳された経験や抱きしめられた経験のないさびしさを十分に受け止めることはできませんでした。彼のためにはたくさんの方の力が必要と考え、彼のためだけに心や時間を費やして下さる方、そんな存在を作りたいと思いました。そんな時、乳児院でお世話になった職員の方、そして光の子どもの家で指導員として働いていた元職員の方が、自分たちでよければ…と名乗りをあげてくださいました。学校行事への参加、子どもの家の行事への参加、時には泊まりがけで来て下さったり、彼を自宅に招いて宿泊させて下さることもありました。

こんなお二人の関わりのおかげで、成黎にとってお二人は特別な存在となっていました。

こうして、たくさんの方の協力を得て、家族関係の希薄さをどうにかカバーしていこうと考えながら成黎の成長を見守っていた時、児相から里親委託の話がありました。成黎の家族との再統合の可能性については、入所時から変化は無く、入所から七年が過ぎようとしている今頃になってなぜ、里親委託の話が浮上したのか疑問でした。こちらからは、里親委託を積極的に進める考えは無いという思いを伝えましたが、児相の決意は固く、結局里親委託の方向で進められることになりました。

里親の横田さんは、これまで何人もの子どもを育てて来られた大ベテランでした。にこやかな表情で、おだやかな口調でお話をされる方で、優しさの中にこれまでたくさんの子どもたちを育てて来られた自信と誇りを持っておられる方という印象を持ちました。

何回かお話を重ねていく中で、成黎にとって何が一番良いのかを考え、お互いにその為に必要なことをしていきましょう、里親宅へ行くことになっても、このままここで生活することになっても、成黎の応援者として協力していきましょう…という結論になりました。

この時、私は成黎にとって、光の子どもの家にいることが、私が担当者であることが一番である――と思うことができませんでした。むしろ、彼が望むのであれば、横田さんご夫婦に育てていただいた方が幸せなのではないだろうか…とさえ思いました。

しかし、今考えてみると、もし自分の子どもであったら、自分が子どもにとって一番の親であろうがなかろうが、子どもを手放すことなどしないはずではないだろうか…と思うのです。

隣の家のほうが大きく金持ちだから、隣の人は偉大だからという理由で、隣の人に育ててもらいたいなどとは決して思わないのです。

今回の里親委託の話は、私たちが積極的に進めてきたものではありませんが、私にもっと力があったら、私にもっと自信があったら、私が彼の母になれていたら、違った結果になっていたのかもしれません。

今年の夏、彼は倉澤家に宿泊し、他の子どもたちと登山に出掛けました。電話も時折あります。後から横田さんから伺うと、何か悲しいことや嫌なことがあった時にこちらに電話がしたい…と言うようです。電話の向こうで「かあさん。」と呼ばれる資格のない私のことをいまだに「かあさん。」と呼んでくれている成黎です。

2011年度も基準外職員確保のための
バザーを行います。
品物のご協力をお願いします。
光の子どもの家バザー実行委員会

日誌抄 ＝子どもと創る暮らしの風景＝ 2010年10月1日▶11月末日

２０１０年１０月現在
幼児９名　小学生１３名　中学生９名　高校生６名　措置外４名　計４１名

２日　幼稚園運動会　彬がたくさん練習した鼓笛を披露してくれた　成長を実感
８日　東大宮教会山ノ下恭二牧師による夕礼拝　礼拝奉仕感謝
９日　聖学院大学ワークで５名来訪　子どもたちと遊んでくださる
１２日　中学校との連絡会　二学期に入り先生方から見た子どもたちのさまざまな面を知る貴重な機会　感謝
１３日　赤十字奉仕団による除草奉仕　光の子どもの家後援会によるそば会　多くの方々のご協力に心より感謝
１４日　長年光の子どもの家を支え続けてくださった中島英子様がご逝去　感謝とともに魂の平安を祈る
１７日　カリフォルニア大学からの元インターンシップ生森本智恵さん来訪　久しぶりに会う子どもたちの成長ぶりに驚いていた
２１日　小舎制養育研究会へ田中施設長と菅原ＳＶと岩崎保育士　菅原による基調講演とパネルディスカッション　それぞれの施設の設立理念を保持し続ける必要性と児童養護施設が小舎化に向かう流れの中で“はたらく”という事への各職員の意識の差をひしひしと感じた
２６日　卒園生佳織の結婚お祝い会　新たな生活のために皆からの祝福と篤き祈り
２７日　諸川教会若槻健悟牧師による職員礼拝　礼拝奉仕感謝
３０日　光の子どもの家自立進学基金の総会へ菅原ＳＶと鈴木(洋)指導員　多くの方々からご支援いただき子どもたちの高卒後の進学の道が保証されている　心から感謝

１１月
３日　第92回光の子どもの家理事会　第26回感謝の集い　設立25周年の節目を迎え多くの方々が御出席くださった　晴天のもと25年分の感謝を伝える機会　感謝と共に更なる子どものためのはたらきに尽力する事を決意
１３日　誠が４年制大学に合格　高校の先生方のご協力もあり無事合格できた　皆さまの祈りに感謝
２８日　第一アドベント礼拝　祝会
２９日　日本社会事業大学藤岡孝志先生による施設内研修　今回で３回目となる　多数の児童養護施設を研究対象とする藤岡先生の視点から貴重な学びの機会を頂いた　心より感謝

〈１０・１１月の物品ご寄贈者〉
鈴木春香　高田知佳　香川妙子　吉野久美子　冨田農園　吉田せつ子　金子太郎　志ほ屋　あけぼの園　斉藤康光　横田美容室　埼玉新聞　中江　大川誠子　島野常一　小林加吉　高橋和男　マルキチ物産　藤沼畜産　米盛あゆみ　小林加奈　西貝京子　横倉やよい　市江満子　山口泰弘　千代田教会　川口雅資　後藤利子　石田洋子　天野登美子　杉山和俊　津村幸子　藤田陽子　加藤晶子　ほか多数の御各位様

☆明けましておめでとうございます　昨年も多数の方々からお支えいただき感謝いたします　今後ともよろしくお願い申し上げます（洋）

反射光

☆新年明けましておめでとうございます☆旧年中も本当に多くの方々にお支えいただき子どもたちそれぞれの豊かな成長が見られましたことを心から感謝しております☆年末になりますと遠くに住む親戚が久しぶりに集まったり自立した子どもが里帰りしたりと一年の内で最も家族の色が濃くなります☆光の子どもの家にも卒園生たちが大勢顔を見せに来てくれます☆新しい家族を連れてくる卒園生もいれば仕事も生活もまだまだ心配の尽きない卒園生も☆そんな「色」たちが集まって光の子どもの家のお正月が濃く彩られます☆原則十八歳までが対象となっている児童養護施設ですが私たちのはたらきは十八歳までで区切れるものではありません☆心配と期待が入り交じった「出来るだけ繋がっていたい」という気持ちは職員のもの☆卒園していった共に暮らし合った仲間に久しぶりに会い飛び上がって喜ぶ子どもたちの気持ちのほうが卒園生には響くのかもしれません☆子どもたちは皆そんなお正月が大好きです☆二〇一一年も皆様に豊かな恵みと祝福がありますようにお祈りします☆本年もどうぞよろしくお願い申し上げます☆　（洋）